

骨軟部腫瘍と患肢温存術

骨軟部腫瘍とは骨や軟部（筋肉、脂肪、神経、血管など）の組織から発生する腫瘍で良性と悪性があり、悪性腫瘍は特に肉腫と呼ばれる。多くの悪性腫瘍は上皮性でがんと呼ばれ、その認知率は非常に高いが、原発性肉腫は全悪性腫瘍の1%を占める程度で認知率は非常に低い。発生数が少ない一方、種類は多く診断が困難なことから進行してから病院を受診される方が多いのが現状である。

骨に発生する悪性腫瘍で最も多いのはがんの骨転移、特に乳がん、肺がん、前立腺がん、多発性骨髄腫（血液のがん）であり、がんによる骨破壊や弱化による骨折や骨の痛み、関節痛から発見されることも多い。

骨原発の悪性腫瘍で最も多いのが骨肉腫で、沖縄県では年間3～5人程度の発生数である。10歳代に発生することが多く、両親が成長痛と思い込んで病院受診が遅れ、受診時に肺や他の骨に転移を伴っていることも少なくない。長引く骨の痛みや関節痛は整形外科受診をお勧めする。

「しこり」とは筋肉や皮下組織が凝り固まった様子をさし、「こぶ」とは隆起した異常な組織をさす。急に大きくなる「しこり」や「こぶ」は軟部肉腫の可能性があり、筋膜や骨膜に浸潤し初めて痛みを感じて受診する人も多く、受診時に肺に転移していることもある。体に5センチ以上の「しこり」や「こぶ」を自覚した場合は、速やかに検査を受けてほしい。

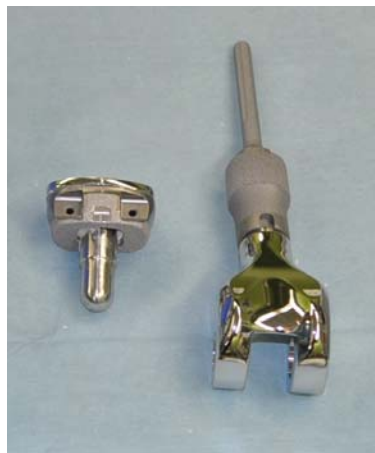
骨肉腫を例にとってみると、1980年代は10人中1人しか生存できない状況で、患肢の切断を余儀なくされていたが、化学療法の進歩に伴い現在では10人中8人が生存し多くの例で切断は不要となり治療成績は劇的に改善している。

琉球大学医学部附属病院整形外科では悪性骨軟部腫瘍について、腫瘍骨を液体窒素に浸けて腫瘍細胞を死滅させて腫瘍骨を再利用する液体窒素処理自家骨移植術や血管柄付き骨移植術を行っている。関節骨の再建には腫瘍用人工関節を使用し、アルコール処理法による重要な神経血管の温存や、巨大な筋肉や皮膚の欠損した場合の筋皮弁術による患肢の温残などにも取り組んでいる。

（整形外科医師・前原博樹）



液体窒素処理自家骨移植術



腫瘍用人工膝関節

問い合わせは整形外科講座まで。

電話098（895）1174、FAX098（895）1424。